

「キムとは誰か」

—文学テキストにおける異文化理解の一考察—

山 本 卓

I

近年、国際化や異文化理解といった言葉がいたる所で声高に叫ばれている。文部省による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」の答申にも、教育の基本姿勢の一つに「国際化への対応」が掲げられている*¹。国際化の視点を導入した教育とは「広い視野を持って異文化を理解し、異なる文化や習慣を持った人々と偏見を持たずに自然に交流し共に生きていくための資質や能力の育成を図ることをねらいとしたもの」である。そして、それらの実践に向けて、答申は、日本の「歴史や文化・伝統に対する誇りや愛情と理解を培う」必要性と、従来の西洋文化偏重を改め、「アジア諸国等にいっそう目を向ける」姿勢を唱える。

箕浦康子の『地球市民を育てる教育』は、自己理解に基づく異文化理解教育の意義を強調している点で、文部省の提唱する「国際化への対応」と呼応する*²。彼女によれば、現在我々は「多文化化する社会にふさわしいアイデンティティとはどのようなものかを考えながら、地球時代に必要な文化的多様性を楽しめる態度や感性を育てる教育理念を創出する」(40)ことを迫られているのである。箕浦は国際理解を目指す教育が実行可能となる理想的な社会像を、次のように述べる。

地球市民教育のバックボーンになっている人間存在の理想的なあり方は、「世界に心を開いている」状態であり、それが多くの人に共有され、支配的な意味体系になっている社会である。(48)

ここでの記述は、一見すると何ら問題のない発言のように思われる。異文化理

解のためには他者を受容する姿勢が重要であろうし、またその姿勢を多くの人が分かち合うことがなければ、個人の一方的な文化理解に収斂してしまうだろう。しかしながら、「支配的な意味体系」という表現に着目するとき、彼女の記述が矛盾を孕んでいることに気付く。もし「『世界に心を開いている』状態」が、社会において「支配的な」意味を持つならば、異文化に理解を示さない姿勢を採択することはタブーとなる。多様性という観点に立脚してみると、異文化を拒絶する態度も様々な立場を構成する一要素であり、そのような態度の否認はとりもなおさず、多様性に背を向ける行為に他ならない。箕浦の言説における矛盾は、多様性という言葉に対する彼女の無批判な姿勢を示唆してはいないだろうか。すなわち、箕浦は多様性が自ずと肯定的な意味を有している言葉と仮定して議論を進めているのである。現在、アメリカとソ連に象徴された東西の対立が消失し、多大な影響力を持つアメリカ文化が世界中に浸透しつつある事実を踏まえると、多様性を強調することは意義があるように思われるし、多文化主義の意義を否定することは困難であろう。しかし、これらのことは必ずしも、多様性が肯定されるべき概念であることを物語っているわけではない。

多様性に対して無意識に肯定的意味を賦与するナイーブな態度は、箕浦特有のものではなく、英語教育においても同様の言説が見受けられる。大谷泰照は「英語教育と人間教育」において「言語文化の多様性と相対性に目覚め、その価値を認め、相互に自然のままに交流しあう」姿勢を「人間のあるべき態度」

(10)と断言する*³。箕浦と大谷の両者の議論に共通するのは、英米の教育が多様性を承認しつつあるという実態をその論拠としていることである。彼らの論考は、西洋の教育制度が日本のそれよりも進歩しているということを暗示しているが、欧米の教育方針の無批判な受容は、むしろ「多様性」という隠れ蓑をまとった画一的な言説を、西洋から継承し維持することにはならないだろうか。なぜなら、今日、西洋文化が特権的な位置を占めている事実を踏まえるとき、欧米の教育者がその子供達に対して多様性の必要性を訴えることと、非西洋の文化圏に属する我々が多様性を唱えることは、その意味合いにおいて大きな差異が存在するからである。西欧文化圏の人々の非西洋文化に対する姿勢に習って、我々がアジア諸国の文化の特異性を認識することで満足している限り、そ

れは西洋の模倣に過ぎず、結果として多様性への逆行を招くだろう。教育において多様性を指向するのであれば、教育者は最初に自己の主体の位置を確認することが要求される。我々は、自国を含めた様々な文化に対して、我々が向ける視線そのものの再検証を求められているのだ。

しかし、普段の生活において、我々の主体の問い直しを要求されることはほとんどないし、その機会も与えられない。従って、主体の問題を考察するためには、特別な場が必要となる。松村昌家は、ディケンズによる教育を扱った小説において表象される問題と、現在我々が抱える教育の問題点との一致を指摘し、英語教育者の「英文学再認識の必要性」(23)を強調する*4。彼の小論は読者の人間形成に対する文学の効用を指摘するにとどまっているものの、英文学作品の読解において読者が主体の位置を問い直しうる可能性を示唆する。もし文学テキストの読解が解釈者の姿勢を問題化するならば、作品読解によって、我々は我々自身を再発見することになるだろう。この小論ではラジャード・キプリングの『キム』(1901)を取り上げ、主人公のアイデンティティを検証する。様々な人種が混交するインドにおいて、キムが確立するアイデンティティを検証することが、我々の主体に内包された問題を現前化する契機となることを提示したいと思う。

II

イギリスの風刺画家、マックス・ビアボームが描いたキプリングの風刺画は、作家について当時の人々が抱いた一つの見解を示す。そこではローマ式の兜をかぶったキプリングが、ローマ風の衣装をまとった女性と腕を組んで、進軍ラッパを吹いている。彼女は大英帝国を擬人化したブリタニアであり、キプリングは彼女と共に大地を闊歩する。ビアボームが描く帝国主義者としてのキプリング像は、現在に至るまで彼にまわりついてきたイメージでもある。

キプリング批評の代表的な論文の一つ、「誰も読まないキプリング」においてエドモンド・ウィルソンは、キプリングの作品を三期に分類し、作者の伝記的事実に即して作品のテーマの変遷を論じる*5。彼は『キム』についてもキプリン

グの体験を重視した読解を実践している。

Kipling has established for the reader—and established with considerable dramatic effect—the contrast between the East, with its mysticism and its sensuality, its extremes of saintliness and roguery, and the English, with their superior organisation, their confidence in modern method, their instinct to brush away like cobwebs the native myths and beliefs. We have been shown two entirely different worlds existing side by side, with neither really understanding the other, and we have watched the oscillations of Kim, as he passed to and fro between them. But the parallel lines never meet; the alternating attractions felt by Kim never give rise to a genuine struggle. (30)

『キム』の中では東洋とイギリスが、神秘性と理性の対立関係で表象されており、それらの二つの世界は決して交わることがないとウィルソンは述べる。彼によれば、キムは大英帝国という巨大な機構に一方的に取り込まれてしまうため、ラマに代表される東洋と、クライトンによって象徴される西洋との二つの文化間の相互理解は達成されないことになる。

分断され、相互理解を伴わない東西の関係という批評テーマは、『キム』の読解において現在も踏襲されているように思われる。エドワード・サイードは『キム』を「帝国主義の主要作品」(45)と位置づけ、作品において表象されるインドが現実と想像を混交させた「審美的な幻想」(45)の産物と論じる*6。『キム』のインドとは「不変的かつ魅力的で、永遠にイギリスの一部」(34)であり、西洋に対してあくまでも従順な「東洋化された」場なのである。サイードは作品を詳細に検証し、説得力のある論理を展開しているものの、クライトンとキプリングの短絡的な重ね合わせは、彼の読解における伝記的事実の偏重を仄めかす。帝国主義者としてのキプリング像が彼の論考の前提となっており、従順なインドという結論は予め用意されていたのではないかという疑念が生じるのである。

キプリングの生涯を顧みるとき、彼が帝国主義者であったことを否定するの

は困難だろう。また、悪名高い「東洋と西洋のバラッド」の存在もウィルソンやサイドの議論に妥当性を与えているようにみえる。

Oh, East is East, and West is West, and never the twain shall
meet,
Till Earth and Sky stand presently at God's great Judgment Seat;
But there is neither East nor West, Border, nor Breed, nor Birth,
When two strong men stand face to face, tho' they come from the
ends of the earth!*7

詩人は冒頭で「東洋は東洋であり、西洋は西洋であり、両者は決して交わることがない」と語る。しかしながら、この一節を最後まで読むと、東西の乖離が不変のものではなく、分断が解消する契機が暗示されていることに気付く。地球の果てから二人の強者が現れ、彼らに対峙するときには、「東洋も西洋も、その境界線も、人種も出自もない」のである。

詩の語り手とキプリング自身を同一視することはできないものの、キプリングの詩において東洋と西洋が交わる可能性が仄めかされていることは、『キム』の解釈に新たな視座を提供するように思われる。テキストは東洋と西洋が混交した多文化的な場を読者に提供しているのかもしれないのである。実際のところ、物語の最後の場面は、決定的な東西の分断を提示するわけではない。

“Why not follow the Way thyself, and so accompany the boy?”

Mahbub stared stupefied at the magnificent insolence of the demand, which across the Border he would have paid with more than a blow. Then the humour of it touched his worldly soul.

“Softly—softly—one foot at a time, as the lame gelding went over the Umballa jumps. I may come to Paradise later—I have workings that way—great motions—and I owe them to thy simplicity. Thou hast never lied?”

“What need?”

....

“Allah forbid it! Some men are strong in knowledge, Red Hat. Thy strength is stronger still. Keep it—I think thou wilt. If the boy be not a good servant, pull his ears off.”

With a hitch of his broad Bokhariot belt the Pathan swaggered off into the gloaming, and the lama came down from his clouds so far as to look at the broad back. (335)*⁸

解脱を遂げたラマはイスラム教徒であるマハブブに向かって、キムと共に仏教の正道を歩むように提言するが、マハブブはラマの無礼な質問を受け流し、彼の生き方を貫くことを主張する。しかし、マハブブは東洋的なものを否定し、主人公の東洋から西洋への完全な編入を促すこともない。将来の諜報任務のためにキムを連れ戻しにやってきたはずのアフガニスタン人は、ラマにキムを託して帰ってしまうのである。また、この後に続くキムとラマの会話では、キムのラマに対する気遣いだけが描かれており、彼の本来の任務である諜報活動のことには一切言及されていない。物語が東洋と西洋の境界線の構築を企てているのであれば、東洋性の象徴であるラマのもとに主人公を置き去りにする最終場面は、テキストのベクトルと矛盾するだろう。ウィルソンの解釈とは逆に、『キム』は東西の接触を具現化したテキストとして浮上する。物語においてキムが東洋と西洋のいずれの世界に属するかを考察するとき、テキストが提示する結論は読者にとっては極めて両義的である。しかし翻ってみると、この曖昧な結論は我々の作品解釈の自由度を拡大する。キプリングの伝記から一定の距離を置き、テキストに表象されるキムのアイデンティティが東西のどちらを指向しているかを決定することは、我々自身のテキストの読み方に深く関わるのである。

III

『キム』を構成する15の章は、その内容によって三つに分類することができる。最初の5章においては、インドの雑踏を舞台に、ラマ僧やクルの老后といった、東洋の人間と主人公との交流に焦点が当てられている。しかしながら、

次の5章では、主人公が遭遇する人物は、諜報部員であるクライトン大佐や、ベネット牧師、ヴィクター神父など、主に白人に限定される。ここにおいて、主人公は二つの世界を経験する。一つは彼の幼少期を過ごす東洋であり、もう一方は、彼が英国式の教育を受ける西洋である。これらの二つの世界は、キムがラマと共に「大いなるゲーム」に参入する、最後の5章において混交する。キムのアイデンティティを検証するにあたって、成長過程の主人公に影響を与える登場人物が全てインドにとっての部外者であること、そして、キムが形成する自我は雑多性という点で、物語中で表象されるインド像と合致することを提示したいと思う。

キムが孤児であることは、ビルドゥングスロマンを意図した物語において、重要な要素となっている。彼は孤児であるが故に、彼の親を自由に選択できるのである。物語には、ラマ僧やマハブブ、クライトン、クルの老后という四人の保護者的役割を担った主要登場人物が存在する。興味深いことに、ラマ僧はキムに最も大きな影響を与える重要人物でありながら、彼には固有の名前が与えられていない。仏教に造詣が深かった作者が、チベット人の名前についての知識を持ち合わせていなかったとは考え難い。また、ラマ僧と同様、クルの老后の名前も一切言及されていないことも奇妙に思われる。キムは最終章において、彼女を「母」(326)と呼びかけていることから、この老后が主人公の自我形成にとって重要な役割を演じることは否定できないだろう。ラマ僧とクルの老后に一致する事柄は、両者がインドの辺境地からやって来ていることである。ラマ僧は聖なる川を求めてインドを放浪するチベット人仏教徒であり、インドにおいて主流を占めるヒンズー教徒ではない。一方、クルもインドとチベットの国境付近に位置し、そこは、ロシアのスパイによれば「(イギリス)女王の法律が届かない」(248)場所とされている。キムが慕う両者は西洋にとっての他者であると同時に、インドにおいても部外者なのである*⁹。

インドという場を中心に据えるとき、マハブブやクライトンもインドの部外者となる。マハブブはイスラム教徒のアフガニスタン人であり、クライトンもイギリス人であることから、彼らはインドとは完全に異質の存在として描かれる。特に、クライトンが諜報部員以外のアジア人と会話する場面は一切存在し

ないし、東洋的なものに接触する姿も見られない。

No money and no preferment would have drawn Creighton from his work on the Indian Survey, but deep in his heart also lay an ambition to write "F. R. S." after his name. Honours of a sort he knew could be obtained by ingenuity and the help of friends, but, to the best of his belief, nothing save work—papers representing a life of it—took a man into the Society which he had bombarded for years with monographs on strange Asiatic cults and unknown customs. Nine men out of ten would flee from a Royal Society soiree in extremity of boredom; but Creighton was the tenth. . . .

(222-3)

クライトンは諜報部員であるが、表向きは民族調査局長を名乗っている。しかし、彼の人生の最終目的は、インドにおけるイギリス官僚機構の頂点を極めることではなく、王立協会の学会員を名乗ることである。より効率的なインドの支配に貢献しつつも、彼はインドを「奇妙な祭儀や未知の習慣」に満ちた調査対象として認識しているため、その視座はインドの外部に置かれている。「命令次第であちこちに飛ばされる」クライトンにとって、インドとは世界に散らばる大英帝国の植民地の一つに過ぎず、そこでは彼はインド人のいない一等列車に乗る部外者である。

ここまで、主人公に影響を与える主要登場人物が、全てインドにおける部外者であることを指摘してきた。しかし「インドにおける部外者」という表現を用いる場合、『キム』が表象するインドを検証する必要性が生じる。物語には様々なインドの情景が提示されているが、その中でも「大主幹道」における描写に『キム』におけるインドが集約されている。大主幹道では、道路の端を歩く一群の遊行乞食に始まり、監獄を出所したばかりの囚人、シーク教徒、市場帰りの村人の集団、チャンガール族の女性達、結婚披露宴の行進、そして、高利貸しやインド兵士など、様々な人々が彼らに適した足並みで歩く。

The Grand Trunk at this point was built on an embankment to guard against winter floods from the foothills, so that one

walked, as it were, a little above the country, along a stately corridor, seeing all India spread out to left and right. It was beautiful to behold the many-yoked grain and cotton waggons crawling over the country roads. . . . It was equally beautiful to watch the people, little clumps of red and blue and pink and white and saffron, turning aside to go to their own villages, dispersing and growing small by twos and threes across the level plain.

(111)

小高い場所に建設された大主幹道からは「全インド」を一望でき、その彼方には田園が広がっている。また、村に帰る人々の集団は色によって類別化されている。大主幹道がインドの縮図であることは、カースト制度において定められたターバンの色によって、象徴されているように思われる。この描写に従って、インド中に散在する村をそれぞれのカーストの色で塗り分けるとすれば、おそらくインドは様々な色によって構成されるモザイクとなるだろう。モザイクにおいては各々の点が単色の色に過ぎないため、どの一構成素もそれ自体では色彩としての意味しか持たず、一つの点に注目して全体像を認識することは不可能である。しかしながら、距離を置いて眺めても、その流動性によって個々の点の正確な位置は把握できないのである。キムが進む大主幹道はまさに、そのようなモザイク的な場として描かれている。そこは様々なカーストの人間が混交し、常に変化をしている場であり、決して均質な姿を見せない。テキストにおけるインドが明確な枠組みを持たないことは、インドの変化自在な性質を示唆する。インドの中に存在する人々は全てインドによって飲み込まれ、新たなインドが生成されるのである。それはクライトンやラマ僧も例外ではない。彼らはインドにとっての部外者ではあるものの、インドに足を踏み入れた時点で、インドの一員となってしまう。

クライトンは王立協会員を目指し、マハブブは頻繁にアラーの神を唱える。また、ラマ僧は常に世俗の煩惱から逃れようと、絶えず自らを律している。クルの老后は、現代のインドが彼女の青年期のそれとは別物であることを強調する。これらの行為や発言は、主要登場人物の性格付けにおいて、彼らを他のイ

インドの人々から差異化する指標として機能する。インドを常に変化し生成する場として認識するとき、我々は物語において主人公に影響を与える人物がインドの部外者として表象されている理由が理解できるかもしれない。すなわち、作者はビルドゥングスロマンの舞台としてインドを採択したが、インドの包容力の大きさ故に、キムを取り巻く登場人物をインドにとっての部外者である印象を常に読者に与えなければならないのである。さもないと、彼らは混沌としたインドに飲み込まれ、差異が消失してしまうのだ。

『キム』において、インドが様々な要素を取り込み、常に変質する存在として表象されているとすれば、成長の過程で東洋的なものと西洋的なものを吸収する主人公をインドの姿と重ね合わせることが可能になる。読者は主人公を通して東洋と西洋を眺めることができるが、それにはキムに備わった特異な性質が大きく寄与している。キムは白人の両親を持つものの、インド人の養母によって育てられ、母国語であるはずの英語よりも現地語を解する。しかし、現地人の容貌をした主人公に内在する白人性は、物語の冒頭において既に指摘されている。

There was some justification for Kim—he had kicked Lala Dinanath's boy off the trunnions—since the English held the Punjab and Kim was English. Though he was burned black as any native; though he spoke the vernacular by preference, and his mother-tongue in a clipped uncertain sing-song; though he consorted on terms of perfect equality with the small boys of the bazar; Kim was white—a poor white of the very poorest. (49)

この場面は子供の無邪気な遊びの場面として描かれているが、背後に政治性を抱えている。キムがイギリス人であり、またイギリスがパンジャブを支配しているという植民地的状況によって、広場に据えられた砲台からインド人の子供を蹴落とす彼の行為は正当化されるのである*¹⁰。また、語り手は、キムの蛇に対する嫌悪感が「いかなる現地での教育によっても、白人の蛇に対する恐怖は消せない」(91)ことに由来し、彼が木の下で立ち上がって演説する様子は、「キムの白人の血」(91)がなさしめるものと述べる。すなわち、キムの幼児性によっ

て曖昧にされてはいるものの、彼は物語の初めから、白人がインド人に対して持つ特権を行使している。

5章以降で描かれる教育は、主人公が自己の白人性を強く意識する過程であり、それは9章における「自分は白人であり、白人の息子であり、それだけで十二分なのに、おまけにナックラウの生徒なんだ」(198)という彼の独白によって裏付けられるように見える。しかしながら、物語のコンテクストを踏まえると、この独白は必ずしもキムの西洋人としての覚醒を意味するわけではない。キムは西洋式の教育を受けることによって、白人としての自己を意識すると同時に、彼に内在する東洋なるものも顕在化させるのである。

“The Colonel is the servant of the Government. He is sent hither and yon at a word, and must consider his own advancement. (See how much I have already learned at Nucklao!) Moreover, the Colonel I know since three months only. I have known one Mahbub Ali for six years. So! To the *madrissah* I will go. At the *madrissah* I will learn. In the *madrissah* I will be a Sahib. But when the *madrissah* is shut, then must I be free and go among my people. Otherwise I die!”

“And who are thy People, Friend of all the World?”

“This great and beautiful land,” said Kim. . . . (183-4)

キムは、休暇中にはインドの人々のもとへ帰ることをマハブブに語る。物語の前半部においても主人公はインドを「俺の国」(114)と述べているが、この引用の時点とはキムの置かれた状況が大きく異なる。教育を受けた彼にとって、大佐は「命令によってあちこちに飛ばされる」ような「政府の従僕」に過ぎない。また、彼は旧友のマハブブが大佐のもとで働く諜報員であることも看破する。キムは教育を通じて白人の世界を知ることによって、より客観的な視点を獲得し、彼の主体の位置を、彼を取り巻く人間関係の中で再構築しているのである。上の引用での「俺の人々」という言葉は、主人公の新たな自己認識に依拠して発せられており、彼のアイデンティティにおいて東洋性が不可分であることを示す指標となる。この後に続く3年間の教育は、キムが白人としての自

覚を深めていく過程であるが、彼は依然として、街頭で「ヒンドゥーの商人から砂糖菓子を買ひ、それを大喜びしながらほおぼる」(232) インドの少年でもあるのだ。

キムの成長の検証において、二重のアイデンティティによって引き起こされる主人公の葛藤はとりわけ重要であろう。白人に接触し自己の西洋性を意識すると同時に、キムは「キムとは誰だ」(166)と自問し始める。クライトンやマハブブは主人公の持つ異種混交的なアイデンティティに注目し、彼を諜報部員に仕立て上げる。キムは生来備わった特質によって自在に東洋と西洋の間を行き来し、成果を上げる一方で、自我の確立に苦しむのである。

“I am Kim. I am Kim. And what is Kim?” His soul repeated it again and again.

He did not want to cry—had never felt less like crying in his life—but of a sudden easy, stupid tears trickled down his nose, and with an almost audible click he felt the wheels of his being lock up anew on the world without. Things that rode meaningless on the eyeball an instant before slid into proper proportion. Roads were meant to be walked upon, houses to be lived in, cattle to be driven, fields to be tilled, and men and women to be talked to. They were all real and true—solidly planted upon the feet—perfectly comprehensible—clay of his clay, neither more nor less. (331)

キムは初めての大きな任務を経験した疲労から昏睡状態に陥り、その後、再びアイデンティティの問題に直面する。主人公は「外界とは噛み合っていない」(331) 状態であるため、「キムとは何か」と繰り返す。主人公は外界との接触を取り戻すが、彼が新たに獲得する世界観は「道路は歩くためのもの、家は住むためのもの、家畜は働かせるもの、畑は耕すもの、人々は話しかけるもの」というごく平凡なものである。また、「(世界の物事は) それ以下でもそれ以上でもない」という部分は、キム自身が「それ以上でもそれ以下でもない」存在であることを含意する。物語が最終的に我々に提示するキムとは、世界の中で

の自己の位置を認識した「等身大のキム」なのである。「等身大のキム」という言葉は、「みんなの友達」と呼ばれ、ラホールの市場を自由に徘徊していた主人公の姿を喚起させるかもしれない。物語の前半部におけるキムは、自己の立場を正確に認識しているからこそ、常に彼が利益を得ているにもかかわらず、人々から愛される。幼少時の主人公と最終章における彼との最大の差異は、彼のなかの客観的視座の有無であるが、彼はアイデンティティ・クライシスを経て本来の彼自身へと回帰する。

前章で述べたように、物語は「等身大のキム」の将来を暗示せず、曖昧にしたままで幕を閉じる。すなわち、アイデンティティが過去から現在の一貫性をもち、その持ち主の未来像を予期させるものならば、キムのアイデンティティは、将来像を提示しない点において、いまだ流動的である。インドと同様、西洋性と東洋性を併せ持った彼の不確定な自我は、クライトンやラマといったインドにとっての部外者の視点を包摂し、変化と拡張を繰り返す。キムは不定形なアイデンティティによって、ラホールの市場の「みんなの友達」から、インドにおける「みんなの友達」に至るのである*¹¹。

IV

これまで我々は、作品において表象されるキムの自我の不定形性が、インドの抱える流動性に相同すると論じてきた。しかし、厳密に言えば、「不定形なアイデンティティ」という叙法は矛盾を孕む。*OED*でアイデンティティ (identity) の項目を参照すると、第二項に「常時、もしくは全ての環境における、人や事物の同一性。人や物事がそれ自体であり、他のものではない状態や事実。個(別)性。人格」と記されている。主人公が到達する「等身大のキム」とは「他のものではない状態」であり、この点においては *OED* の定義と合致する。しかしながら、拡張し変化するキムの自我は「常時、全ての環境における、人や物事の同一性」を持たない。変化は同一性を拒み、環境によって異なる姿を出現させる。もし我々が後者の定義を重視するのであれば、「不定形なアイデンティティ」という表現は撞着語法となるだろう。

*OED*ではアイデンティティの類語として個(別)性や人格が示されているが、個(別)性(individuality)の定義において興味深いのは、“separate”や“distinguish”など、分離を意味する単語が用いられていることである。特に「分離し、継続的な存在」と規定される個(別)性の定義の第二項は、「個人に特有の資質の総体。ある対象を同種の対象から区別する特質の集合」と定義される第三項と同様に、我々が今扱っている人格の問題に深く関わる。また、人格(personality)には「他人とは異なることで、人を彼自身とする資質、または資質の集合」という定義が与えられている。*OED*におけるこれら単語の定義から、個人のアイデンティティとは他者から分離し、自己の中に継続性、つまり一貫性や統一性を保持したものであることが分かる。更に、この辞書がイギリスで出版されているという事実を踏まえるとき、*OED*が規定するアイデンティティの概念は西洋的な主体の在り方である可能性が高くなる。*OED*がアイデンティティに関係する言葉を定義づけるとき、定義の背景には統一性を持った西洋的主体が存在するように思われるのだ。

サイードは『オリエンタリズム』において、西洋が自らの主体を形成するために東洋という概念を創出してきたと論じる^{*12}。東洋を西洋に対する他者として規定することによって、西洋は「東洋とは異なる存在」として自らの西洋像を構築してきたのである。オリエントは単なる地理上の区別の指標だけではなく、非西洋という点において西洋の主体形成に大きな役割を果たす。東洋で見聞した事実は、西洋の手によって分類、制度化され他者という枠に範疇化されるが、オリエンタリズムの言説において重要なことは東洋というイメージであり、東洋的事象の解釈の仕方なのである。

The Orient is not only adjacent to Europe; it is also the place of Europe's greatest and richest and oldest colonies, the source of its civilizations and languages, its cultural contestant, and one of its deepest and most recurring images of the Other. In addition, the Orient has helped to define Europe (or the West) as its contrasting image, idea, personality, experience. (1-2)

西洋の言説の中で、東洋が西洋の対照物として機能するならば、東洋に賦与さ

れる特徴とは、西洋性を転倒させることによって抽出された要素となる。理性において象徴される西洋に対して、東洋が示すものは非合理性であり、統一性に対する流動性であろう。『キム』において読者に提示されるインドが、変化や非統一性によって特徴づけられることは、サイードの提唱するオリエンタリズムの言説と合致する。『キム』が英語で書かれ、英語圏の人々をその読者に想定している事実によって、テキストは巨大な西洋的ディスコースの産物であり、西洋の中の流通を経て、必然的に西洋の主体形成に寄与することが示される。彼がクリストファー・ハッチェンを引用して述べるように、キプリングの小説は「想像力によって、この東洋化されたインドにとっての主要な貢献物」(28)として機能するのである。

テキストにおけるインドの表象に関する限り、サイードの『キム』論は有効である。しかし、西洋人を両親に持つ主人公が「不定形なアイデンティティ」しか構築せず、西洋的な主体よりもむしろ東洋的な主体を形成することを考慮するとき、テキストは、西洋的な統一された主体の形成の困難さを物語ると同時に、オリエンタリズムの言説を用いた作品読解の不完全さを示唆する。『キム』において東洋は一貫性の欠如したものとして差異化されるものの、文化的混血児である主人公は西洋の枠組みに完全には包摂されないのである。キムは彼の流動的なアイデンティティによって、常に外観を変化させる。彼は東西の境界線を曖昧にし、権力ネットワークの強化のために西洋が一方的に行う配置から逃れる可能性を秘めている。『キム』の読解において我々の主体を問題化する契機が存在するのは、この点に他ならない。

ここまでの我々の論考によって、『キム』を異文化が混交する多文化的な空間として位置づけることが可能となるだろう。しかし、テキストの多文化性を認識するだけでは、オリエンタリズムの言説に飲み込まれる危険性を多分に孕む。ジョン・トムリンソンやチャールズ・テイラーが指摘するように、文化帝国主義を批判するために安易に多文化主義を用いること自体、西洋において特権化された自由主義の言説を反復、強化することにつながるのである*¹³。また、日本人である我々が地理的、文化的に西洋と異なるため、自ずと西洋における他者の役割を担わされているのであれば、我々が多文化主義的なテキストという

点でキプリングの作品を評価しても、それは我々の主体における他者性を無視し、西洋的な視点を無批判に採択した結果に過ぎなくなるだろう。キムはいずれ西洋の制度に編入され、スパイとして大英帝国の拡張に貢献するのかもしれない。しかし、一方で、我々のテキスト読解で示される彼の東洋性は、西洋による他者の均質化を阻み、西洋の主体の在り方や我々の主体の位置に疑問を投げかける動因にもなりうる。我々がキムのアイデンティティに関して何らかの評価を与えようとするとき、我々は自らの主体の位置を確認した上で、オリエンタリズムに抵抗しうる彼の潜在力を評価することが求められるのではないだろうか。

我々の主体の在り方を考えるとき、『キム』はインド紳士、ハリー・バブを我々自身の姿として揶揄しているように思われる。ハリーはインド人でありながらも、洋服に身を包み、インド訛の奇妙な英語を操る。

“I do not understand quite. We must not be heard talking English here.”

“That is all raight. I am only Babu showing off my English to you. All we Babus talk English to show off,” said Hurree, flinging his shoulder-cloth jauntily. (231)

ハリーは「我々インド紳士は見せびらかすために英語を話す」と述べる。彼は常に冗談めいた口調で話すので、彼の発言の真意を測ることは難しい。しかし彼が修めた教育や諜報活動に対する彼の自尊心を考慮するとき、この発言はインド人紳士の白人への意志を読者に示すものとなる。キムとは対照的に、ハリーは自らの東洋性を否定し、白人化を企てるのである。もし我々が西洋的な視座を無批判に継承するならば、商人のラーガンがクライトンに皮肉めいて語る「バブが本当は何になろうとしているか知っていますか。民族学の記録を残して、王立協会の会員になろうとしているのですよ」(222) というせりふは我々に向けられたものとなる。国際化や多様化が盛んに唱えられている現在において、絶えず我々の主体の在り方を問い続けられない限り、我々が西洋の模倣に陥ってしまうことを『キム』は暗示する。

- *1 本論文における文部省の教育答申は全てインターネットで公開されている文書に基づく。
<http://www.monbu.go.jp/singi/katei/00000216/>参照。
- *2 箕浦康子、『地球市民を育てる教育』、(東京：岩波書店、1997)。
- *3 大谷泰照、「英語教育と人間教育」、『英語教育』第41巻第1号、(東京：大修館、1992)8-10頁。
- *4 松村昌家、「今こそ英文学に学ぶべきとき：人間性回復のために」、『英語教育』第47巻第2号、(東京：大修館、1998)23-5頁。
- *5 Edmund Wilson, "The Kipling that Nobody Read," *Kipling's Mind and Art*, ed. Andrew Rutherford (London: Oliver & Boyd, 1964), 17-69頁。
- *6 Edward Said, introduction, *Kim*, by Rudyard Kipling, (Harmondsworth: Penguin, 1989) 7-46頁。この論文は後にサイドの『文化と帝国主義』に改訂、収録されている。*Culture and Imperialism*, (London: Vintage, 1994) 159-96頁参照。また、近年の批評ではポストコロニアル批評の影響によって、分断された東西というテーマが主流になっているように思われる。ゾーレ・サリバンは『キム』における語り手の視点に着目し、視点の変化が主人公の主体形成に関係していることを指摘する。彼女によれば、視点の客観化は、キムの白人化と、東洋と西洋の分断に呼応する。Zohreh Sullivan, *Narratives of Empire: The Fictions of Rudyard Kipling*, (Cambridge: Cambridge UP, 1993) 145-77頁参照。
- *7 Rudyard Kipling, "The Ballad of East and West," *Barrack Room Ballads, Departmental Ditties and Ballads*, (New York: J. H. Sears, n.d.) 137頁。
- *8 この論文による『キム』の引用は全て、ペンギン版『キム』を参照している。書誌情報は注6を参照のこと。
- *9 後半部分で用いている「他者」との混乱を避けるため、ここでは「部外者」という言葉を使用している。また通常、他者は西洋を中心とした場合に非西洋的な存在を指す術語であるため、東洋であるインドに対して異質な要素を他者と表現することは不適當であると判断した。
- *10 正確に言えば、キムはアイルランド人である。しかし、作品において、キムのアイルランド人気質には言及されるものの、政治的な要素は一切触れられていないため、ここではキムをイギリス人として解釈している。
- *11 キムは物語を通じて「みんなの友達」と呼ばれているが、彼の成長に伴ってそのあだ名の意味は拡大する。物語の中盤で、現世の人々を超越し、「星々の友達」と名付けられていることは、キムに対する人々の愛情の増大を示唆している。アンガス・ウィルソンはキムの魅力が彼の美德だけに起因するものではなく、狡猾さと性的官能性のためでもあると論じる。Angus Wilson, "Kim and the Stories," *Rudyard Kipling*, ed. Harold Bloom, (New York: Chelsea House, 1987) 32-3参照。
- *12 Edward Said, *Orientalism*, (Harmondsworth: Penguin, 1978)。この本が出版されて既

に20年が経過し、様々な批判がなされている。例えばホミ・バーバは混血性(hybridity)に着目し、サイドの一枚岩的な東洋と西洋の二項対立を批判しているが、サイドが提唱した「西洋による東洋化」という基本概念は、踏襲され続けている。Homi Bhabha, "Signs Taken for Wonders: Questions of Ambivalence and Authority under a Tree outside Delhi, May 1817," *The Location of Culture*, (London: Routledge, 1994) 102-22頁。

- *13 トムリンソンによる『文化帝国主義』とテイラーの論文を中心とした評論集、『マルチカルチュラリズム』は、西洋中心主義への批判という点で視座を共有する。彼らは均質化しつつある世界文化に対して、多様な文化の重要性を訴えているが、同時に無批判な文化の承認が西洋的な言説の強化につながることも指摘している。John Tomlinson, *Cultural Imperialism*, (Maryland: Jones Hopkins UP, 1991) 23頁参照。Charles Taylor, "The Politics of Recognition," *Multiculturalism*, (Princeton: Princeton UP, 1994) 65-9頁参照。